

## 博士論文（要約）

論文題目 人生と闘争の社会学——社会学者・清水幾太郎の思想史的モノグラフィ（1930年代～50年代）——

氏名 品治 佑吉

## 目次

凡例	3
序——清水幾太郎と社会学	4
1章 問題設定	4
1.1 問題の所在	8
1.1.1 社会学と「人生」	8
1.1.2 人生のなかの闘争	15
1.2 先行研究・議論の概観	21
1.2.1 清水幾太郎個人に着目した研究	21
1.2.2 日本社会学の展開の中で	23
1.3 本論の視角、対象、方法	25
1.3.1 視角	25
1.3.2 対象と方法	27
1.4 概要、予想される意義	30
1.4.1 全体の概要	30
1.4.2 予想される意義	33
2章 ある社会学者の出発	34
2.1 社会学との邂逅	36
2.1.1 社会学批判とその内実	36
2.1.2 「文化形態論」	46
2.2 青年論へ——「社会学青年」とともに	51
2.2.1 人間、個人、青年	51
2.2.2 若き読者たち	65
2.3 小括	68
3章 生きた闘争の把握	69
3.1 清水社会学における公と私——往還とその動態	69
3.2 生存の要求とその諸形態——『流言蜚語』	77
3.2.1 隠された政治——「政治と虚言」から『流言蜚語』へ	77
3.2.2 報道と流言	85
3.2.3 報道から輿論へ	89
3.2.4 輿論の諸形態——対立と闘争の諸相	91
3.3 倫理学と闘争——「競闘」	101
3.3.1 『岩波講座 倫理学』と「競闘」	101
3.3.2 闘争、公私、倫理	107
3.4 小括	112
4章 家族——生きるという闘いの場	113
4.1 清水の家族道徳論批判	113
4.2 清水の家族集団論	116

4.2.1 家族への関心の萌芽	117
4.2.2 「運命」としての家族——『社会的人間論』（1940.3）、「競闘」（1941.12）	118
4.3 小括	124
5章 「人生」を語り始める清水幾太郎	127
5.1 若き社会学者の自伝	127
5.1.1 『私の読書と人生』——前史、内容、叙述	128
5.1.2 自己を語らしめた人びと	135
5.2 人生を語る社会学	150
5.2.1 読者たちとの距離の自覚	150
5.2.2 「素人」たちの社会学	156
終章 意義と展望	164
文献	173
清水幾太郎の著作・対談・共著	173
その他	177

### (3) 本文

本論文は博士論文に使用している他者の著作物（図表等）について、インターネット公表に対する著作権者からの許諾が得られていないため、公表できません。具体的な該当箇所は以下の通り。

p.13 安田武写真 ……安田武，[1982] 1987, 『昭和 東京 私史』中央公論社.

p.14 福武直写真 ……蓮見音彦、2008, 『福武直——民主化と社会学の現実化を推進』東信堂.

p.38 野上弥生子 と 長男 素一 写真 ……瀬沼茂樹 1984, 『野上弥生子の世界』岩波書店

p.67 小田切秀雄と妻みゆき写真 ……小田切秀雄全集編集委員会編 2000, 『小田切秀雄全集 別巻 追想の小田切秀雄』勉誠出版.

p.136 安田武・鶴見俊輔・山田宗睦 写真 ……『思想の科学』1988年10月号：〔安田武追悼号〕

以上の写真資料につき、使用の許諾を得ておりません。

5年以内に出版予定。



#### (4) 参考文献一覧

##### 清水幾太郎の単著

- 清水幾太郎, 1929.9, 「エル・アー・ビューゾフ『風評』(『ケルン社会学四季雑誌第七卷第三、四号所載])」『社会学雑誌』65: 89-90.
- , 1932.5, 「文化社会学とマルクス主義社会学」『理想』31: 220-38.
- , 1932.7, 「公民学としての社会学」『岩波講座哲学 月報』8: 4-7.
- , 1932.12, 「社会学とは何か——社会学と社会主義」『理想』36: 114-7.
- , 1933.3, 「社会学と社会科学——座談的に」『理想』38: 163-6.
- , 1933.4, 「史的唯物論と社会学(大森氏は社会学を如何に遇するか)」『唯物論研究』6: 57-86.
- , 1933.8, 『社会学批判序説』理想社出版部。(再録: 1992.4, 『清水幾太郎著作集 1 社会学批判序説・社会と個人』講談社, 3-237.)
- , 1933.11, 「自然法と有機体説——ドイツ社会学史資料」『社会哲学・社会科学評論』1: 1-30.
- , 1933.12, 「現代の危機と理論の実践性——文化形態論の試み」『年報社会学』1: 177-96.
- , 1934.1, 「職業・個人・社会」『郷土教育』39: 2-7.
- , 1934.3, 「現代における人間の危機」『思想』142: 286-305. [論文末尾に「一九三三年夏」と記載あり.]
- , 1934.4, 「非合理主義としてのサンディカリズム」『理想』47: 129-48.
- , 1934.8, 「日本社会学に於ける社会と個人」『思想』147: 76-100. (再録: 1936.2, 『日本文化形態論』サイレン社, 99-144.)
- , 1934.9, 「『社会学評論』の発刊に際して」『社会学評論』1: 145-50.
- , 1934.10a, 「日本的宗教形態に就いて」『思想』149: 63-79. (再録: 1936.2, 『日本文化形態論』サイレン社, 191-235.)
- , 1934.10b, 「日本に於ける実業教育の発展に就いて」『教育』2(10): 67-92. (再録: 1936.2, 『日本文化形態論』サイレン社, 237-99.)
- , 1934.12, 「日本精神に於ける社会と個人」『中央公論』535: 82-93.
- , 1935.5, 『社会と個人——社会学成立史〔上巻〕』刀江書院。(再録: 1948.3, 『社会と個人——社会学成立史』乾元社; 再録: 1956.4, 『社会と個人——社会学成立史』洋々社; 再録: 1992.4, 『清水幾太郎著作集 1 社会学批判序説・社会と個人』講談社, 239-514.)
- , 1935.9, 「新聞記事月評 荻野女史の場合」『児童』3(3): 75-82.
- , 1935.11, 「自己本位の立場」『思想』162: 109-20. (再録: 1936.2, 『日本文化形態論』サイレン社, 301-22; 1991, 平岡敏夫編『夏目漱石研究資料集成 第7巻』211-21.)
- , 1936.2, 『日本文化形態論』サイレン社。(再録: 1947.5, 『日本文化形態

論』東西文庫.)

- , 1936.9, 「社会学」三木清編『現代哲学辞典』日本評論社, 189-203.
- , 1936.11, 「意義の社会理論」『教育・国語教育』臨時号: 212-22.
- , 1936.12, 「公と私」『日本社会学会 年報 社会学』4: 216.
- , 1937.3, 『人間の世界』刀江書院。(再録: 1946.7, 『人間の世界』清水書房; 再録: 1956.5, 『人間の世界』洋々社; 再録: 1992.4, 『清水幾太郎著作集 2 流言蜚語・青年の世界・人間の世界』講談社, 265-381.)
- , 1937.7, 「社会科学的認識に就いて」『思想』182: 78-95.
- , 1937.9a, 「日本に於ける社会教育の特質」『教育』5(9): 7-23.
- , 1937.9b, 「政治と虚言」『思想』185: 63-92。(再録: 1992.8, 『清水幾太郎著作集 6 民主主義の哲学 私の読書と人生』講談社, 241-69.)
- , 1937.10, 『青年の世界』同文館。(再録: 1948.9, 『青年の世界』乾元社; 1956.2, 『青年の世界』洋々社; 再録: 1992.4, 『清水幾太郎著作集 2 流言蜚語・青年の世界・人間の世界』講談社, 131-264.)
- , 1937.12, 『流言蜚語』日本評論社。(再録: 1947.10, 『流言蜚語』岩波書店; 再録: 1992.4, 『清水幾太郎著作集 2 流言蜚語・青年の世界・人間の世界』講談社, 3-129; 再録; 2011.6, 『流言蜚語』筑摩書房, 11-173.) [이효성 訳, 1977, 유언비어의 사회학, 청람; 이재민・오석철 訳, 2015, 유언비어, 기담문고.] [『流言蜚語』韓国語版ならびに翻訳者に関する情報収集・読解を金磐石さんに協力して頂いた。記して感謝したい.]
- , 1938.9, 「公と私の問題」『改造』20(9): 33-43。(再録: 1992.10, 『清水幾太郎著作集 5 組織の条件・美しき行為』講談社, 164-76.)
- , 1939.7, 「女性の叡智」『セルパン』102: 42-4。(再録: 1942.9, 「女性の叡智」『評論集 生活の叡智』実業之日本社, 25-32.)
- , 1940.3, 『社会的人間論』河出書房。(再録: 1948.9, 『社会的人間論』五元書房; 1951.3, 『社会的人間論』目黒書店; 1954.9, 『社会的人間論』角川書店; 1958.6, 『社会的人間論』日本評論新社; 再録: 1992.5, 『清水幾太郎著作集 3 社会的人間論・現代の精神 他』講談社, 9-108.)
- , 1940.8, 「市民社会」『岩波講座 倫理学 第二冊』岩波書店.
- , 1941.1, 「読者」河出書房編『新文学論全集 第三卷 批評・鑑賞』河出書房, 335-72。(再録: 1942.5, 「読者に就いて」『思想の展開』河出書房, 72-112.)
- , 1941.6.12, 「協会の持つ力——出版統制について①」『朝日新聞』東京朝刊 4 面.
- , 1941.6.13, 「人を形成する物: 出版統制について②」『朝日新聞』東京朝刊 4 面.
- , 1941.6.14, 「現実と書物: 出版統制について③」『朝日新聞』東京朝刊 4 面.
- , 1941.10, 「現代アメリカの倫理思想」『岩波講座 倫理学 第十二冊』岩波書

- 店.
- , 1941.12, 「競闘」岩波茂雄編『岩波講座 倫理学 第十五冊』岩波書店。(再録:1992.8,『清水幾太郎著作集 6 民主主義の哲学 私の読書と人生』講談社, 279-99.)
- , 1946.10, 「序文」『現実の再建』白日書院, 1-4.
- , 1948.6, 『社会学講義』白日書院。(再録:1950.6,『社会学講義』岩波書店;再録:1992.9,『清水幾太郎著作集 7 社会学講義』講談社.)
- , 1948.10, 「生死の断層」『藝術』10: 2-13。(再録:1992.10,『清水幾太郎著作集 8 愛国心 「匿名の思想」他』講談社, 219-36.)
- , 1948.12, 「職業としての政治」鎌倉文庫編『社会科学研究(1) マックス・ウェーバー研究 I』鎌倉文庫, 27-44。(再録:2017,『政治の本質』中央公論社, 245-64.)
- , 1949.10.18, 「私は走り続けた——前田善子さんに督励されて」『図書新聞』昭和24年10月18日, 第1面.
- , 1949.10, 『私の読書と人生』要書房。(再録:1956.11,『私の読書と人生』河出書房;再録:1977.8,『私の読書と人生』講談社;再録:1992.8,『清水幾太郎著作集 6 民主主義の哲学 私の読書と人生』講談社, 359-483.)〔発刊1949年10月27日〕
- , 1950.1a, 「庶民」『展望』49: 6-16。(再録:1992.10,『清水幾太郎著作集 8 愛国心 「匿名の思想」他』講談社, 285-302.)
- , 1950.1b, 『愛国心』前後』『図書』3: 12-4.
- , 1950.3, 『愛国心』岩波書店。(再録:1992.10,『清水幾太郎著作集 8 愛国心 「匿名の思想」他』講談社, 3-125.)
- , 1951.2, 『学生論』河出書房。〔1937年に刊行予定だったが中止。1951年2月に再刊。〕
- , 1951.3, 「まえがき」『社会的人間論』目黒書店, 1-2。(再録:1952.8,『社会的人間論』創元文庫, 9-10;再録:1958.6,『社会的人間論』日本評論新社, 9-11;再録:1992.5,『清水幾太郎著作集 3 社会的人間論 現代の精神 他』講談社, 413-4.)
- , 1951.10a, 「私と母」『家庭と愛育 母の光』1951年10月号: 15.
- , 1951.10b, 『社会心理学』岩波書店。(再録:1992.11,『清水幾太郎著作集 9 社会心理学 ジャーナリズム 他』岩波書店, 3-186.)
- , 1952.5, 『日本の女性のために』三笠書房.
- , 1954.5, 『人生案内』岩波書店.
- , 1955.4, 「料理」『婦人公論』40(4): 23.
- , 1955.10, 『女性のための人生論(上・下)』河出書房.
- , 1956.1, 『私の心の遍歴』中央公論社。(再録:1992.12,『清水幾太郎著作集 10 「運動」の内外 私の心の遍歴』講談社, 233-421;2012.2,『私の心の

- 遍歴』日本図書センター.)
- , 1958.11, 「テレビジョン時代」『思想』414: 2-22. (再録: 2003, 「テレビジョン時代」『思想』956: 7-25.)
- , 1959.6a, 「これまでの十年これからの十年——全面講和論者の立場から」『世界』162: 42-51.
- , 1959.6b, 『社会学入門』光文社. (再録: 1970.4, 『社会学入門』潮出版社.)
- , 1959.7.13, 「反対だけで終わらずに 中立日本の具体的な構想を」『週刊読書人』1面.
- , 1959.11, 『私たちはどう生きるか 15 清水幾太郎集 孤独な少年 愛国心について』ポプラ社.
- , 1960.5, 「いまこそ国会へ——請願のすすめ」『世界』173: 18-28. (再録: 1992.12, 「今こそ国会へ——請願のすすめ」『清水幾太郎著作集 10 「運動」の内外 私の心の遍歴』講談社, 115-32.)
- , 1960.9, 「安保戦争の「不幸な主役——安保闘争はなぜ挫折したか・私小説風の総括」」『中央公論』75(10): 178-89. (再録: 1992.12, 「安保戦争の「不幸な主役」」『清水幾太郎著作集 10 「運動」の内外 私の心の遍歴』講談社, 133-53.)
- , 1966.4, 『現代思想 (上・下)』岩波書店. (再録: 1993.2, 『清水幾太郎著作集 12 現代思想』講談社.)
- , 1966.6.9, 「政治の世界・学問の世界<下> 偽善に失望して研究へ戻る」『朝日新聞 夕刊』9面.
- , 1975. 6-7, 『わが人生の断片 (上・下)』文藝春秋社. (再録: 1993.4, 『清水幾太郎著作集 14 わが人生の断片』講談社.)
- , 1980.6, 『戦後を疑う』講談社. (再録: 1993.4, 『清水幾太郎著作集 17 戦後を疑う 「新しい戦後」 他』講談社, 3-228.)
- , 1984.12, 『ジョージ・オーウェル「一九八四年」への旅』文藝春秋社.

#### 清水幾太郎の対談・共著

- 阿部知二・家永三郎・石川達三・岡本清一・亀井勝一郎・木下半治・久野収・島恭彦・清水幾太郎・末川博・竹内好・恒藤恭・中野好夫・奈良本辰也・名和統一・前芝確三・務台理作, [1960.2.15] 1969, 「諸組織への要望」三一書房編集部編『資料 戦後学生運動 5 1959~1961』三一書房, 272-6.
- 荒瀬豊・石川滋・石田雄・石本泰雄・鶴飼信成・加藤周一・久野収・小林直樹・齋藤眞・坂本義和・篠原一・清水幾太郎・隅谷三喜男・都留重人・中野好夫・中村隆英・日高六郎・福田歆一・堀田善衛・丸山眞男, 1959.10, 「共同討議 政府の安保改定構想を批判する」『世界』166: 15-42.
- 清水幾太郎・神吉晴夫, 1963.1.1, 「カップブックス二五〇〇万部突破のヒミツ な

- ぜ？読者と光文社の信頼ムードが生れたか」『新刊展望』129: 2-8.
- 清水幾太郎・木下順二・日高六郎, 1956.6, 「時流裁断 (6)」『群像』11(6): 112-24.
- 清水幾太郎・高橋徹, 1970.1, 「対談 社会学における歴史と人間」清水幾太郎編『世界の名著 36 コント・スペンサー 付録 43』中央公論社.
- 清水幾太郎・安田武・宮本顕治・松村一人・宮城音弥・長田五郎・蜷川譲・高原寛・林果之介・時友正三・一見彦五郎・江川俊夫・片山修三, 1948. 7, 「学生・勤労者に聞く 戦後精神の状況」『思索』1948年7月号: 2-16.
- 大河内一男・清水幾太郎ほか, 1951.3, 『抵抗の学窓生活』要書房.
- 下地寛令・清水幾太郎, 1929.10, 『心理学概論』大学書房.
- 高野実・清水幾太郎・丸岡秀子・中野好夫, 1955.5, 「座談会 ほんとうの選挙はこれからだ——国民はいま何を考えるべきか」『平和』37: 10-23

## その他

- 秋元律郎, 1979, 『日本社会学史——形成過程と思想構造』早稲田大学出版部.
- 天野恵一, 1979, 『危機のイデオロギー——清水幾太郎批判』批評社.
- Averbeck, Stefanie, 1999, *Kommunikation als Prozess: Soziologische Perspektiven in der Zeitungs-wissenschaft 1927-1934*, Muenster: Lit.
- Borcherdt, Hans H., „Bildungsroman,“ in Werner Kohlschmidt und Wolfgang Mohr hg., *Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte. 2. Aufl.*, Bd.1, Berlin: W. de Gruyter, 175-8.
- Bysow, Leonty A., 1928a, „Das sozialpsychologische Institut in Moskau,“ *Kölner Vierteljahreshefte für Soziologie*, 7(1): 134-8.
- , 1928b, „Gerüchte,“ *Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie*, 7(3): 301-8, 7(4): 416-26.
- , 2011, “ИНСТИТУТ СОЦИАЛЬНОЙ ПСИХОЛОГИИ В МОСКВЕ,” *МОНИТОРИНГ ОБЩЕСТВЕННОГО МНЕНИЯ*, 4(104): 107-30. [本論文の読解に当たり、2014年に東京大学教養学部在学中の濱中怜美氏の訳文の作成に協力していただいた。記して感謝したい。]
- 『知性』本誌特派調査団, 1955.1, 「人生論をつくる人々」『知性』2(1): 25-36.
- 趙星銀, 2020, 「清水幾太郎と「危機」の二〇世紀——「流言蜚語」から「電子計算機」まで」『思想』1153: 46-65.
- Coulanges, Fustel de, [1864] 1923, *La cité antique: Étude sur le culte, le droit, les institutions de la Grèce et de Rome*, 28. éd., Paris: Hachette. (田邊貞之助訳, 1950, 『古代都市』白水社.)
- Dahme, Heinz-Jürgen und Klaus Christian Köhnke hg., 1985, *Georg Simmel Schriften zur Philosophie und Soziologie der Geschlechter*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- 田頭慎一郎, 2013, 『加藤弘之と明治国家——ある「官僚学者」の生涯と思想』学習院大学.

- Faris, Robert E. L., [1967] 1970, *Chicago Sociology: 1920-32*, Chicago: University of Chicago Press. (奥田道大・広田泰生訳, 1990, 『シカゴ・ソシオロジー: 1920-1932』ハーベスト社.)
- 藤田省三, 1959.1, 「昭和八年を中心とする転向の状況」思想の科学研究会編『共同研究 転向上』平凡社, 31-65.
- 深澤民司, 1999, 『フランスにおけるファシズムの形成——ブーランジズムからフェソーまで』岩波書店.
- 福田恆存, 1950.1, 「清水幾太郎 著 私の読書と人生」『評論』39: 98-100.
- , [1952.10] 1955.2, 「文学者の文学的責任——「文学者の政治的責任」という課題に答えて」『平和論に対する疑問』文藝春秋新社, 101-20.
- , 1955.2, 『平和論にたいする疑問』文藝春秋新社.
- , 1980.10, 「近代日本知識人の典型 清水幾太郎を論ず」『中央公論』95(13): 138-71. (再録: 1988.4, 『福田恆存全集 第七巻』文藝春秋, 542-78.)
- 福間良明, 2006, 『「反戦」のメディア史——戦後日本における世論と輿論の拮抗』世界思想社.
- , 2009, 『「戦争体験」の戦後史——世代・教養・イデオロギー』中央公論新社.
- , 2017, 『「働く青年」と教養の戦後史——「人生雑誌」と読者のゆくえ』筑摩書房.
- 袋三平, 1937.3, 「会誌文学小論」『第六高等学校校友会 校友会誌』105: 1-4.
- 福武直, 1935.3, 「河合教授の講演を聞きて」『第六高等学校校友会 校友会誌』99: 23-36.
- , 1935.7, 「日本主義素描」『第六高等学校校友会 校友会誌』100: 54-69.
- , 1935.12, 「日本主義素描 (承前)」『第六高等学校校友会 校友会誌』101: 96-119.
- , 1936.2, 「父——とりとめもなく」『第六高等学校校友会 校友会誌』102: 91-6. [筆名: 「大井正彦」]
- , 1936.12a, 「人間存在の社会性——社会学的人間学への途」『第六高等学校校友会 校友会誌』104: 1-21. (再録: 1975.10, 『福武直著作集 第一巻 社会学の現代的課題 社会科学と価値判断』東京大学出版会, 377-99.)
- , 1936.12b, 「どろ沼の矛盾」『第六高等学校校友会 校友会誌』104: 159-63. [筆名: 「大井正彦」]
- , 1937.3, 「思ひつくまま——読書餘録」『第六高等学校校友会 校友会誌』105: 24-32. [筆名「大井正彦」] (再録: 1976.10, 『福武直著作集 別巻 社会学四十年 年譜・著作目録』東京大学出版会, 22-8.)
- , 1976, 『福武直著作集 別巻 社会学四十年』東京大学出版会.
- 福澤諭吉著・松沢弘陽校注, 2011, 『新日本古典文学大系 明治篇 福澤諭吉集』岩波書

- 店.
- 古川隆久, 2005, 『昭和戦中期の議会と行政』吉川弘文館.
- Gostmann, Peter, und Alexandra Ivanova, 2014, „Emil Lederer: Wissenschaftslehre und Kultursoziologie,“ in Peter Gostmann und Alexandra Ivanova hg., *Schriften zur Wissenschaftslehre und Kultursoziologie: Texte von Emil Lederer*, Wiesbaden: Springer VS, 7-37.
- 羽仁五郎, 1929.9, 『転形期の歴史学』鐵塔書院.
- , 1932.5, 『歴史学批判序説』鐵塔書院.
- , 1976.9, 『自伝的戦後史』講談社.
- , 1982.1, 「まえがき」『羽仁五郎戦後著作集 I 歴史論』徳間書店, i-v.
- 八田政季, 2001, 『水底の翳 第1集』八田政季.
- 服部之総, 1950.8, 「清水幾太郎論——庶民への郷愁」『中央公論』65(9): 130-7. (再録: 1975.4, 『服部之総全集 22 葵と菊』福村出版, 165-83.)
- 林房雄, 1941.3, 『転向に就いて』湘風会.
- 林久博, 2002, 「ドイツ教養小説について」『名古屋大学人文科学研究』31: 67-78.
- 林尹夫, 1967.2, 『わがいのち月明に燃ゆ——戦没学生の手記』筑摩書房.
- 林達夫編, 1949.2, 『社会史的思想史』岩波書店.
- 日高六郎, 1956.11, 「まえがきにかえて」清水幾太郎『私の読書と人生』河出書房, 3-6.
- Hijiya-Kirschnereit, Irmela, 1981, *Selbstentblößungsrituale: zur Theorie und Geschichte der autobiographischen Gattung "Shishōsetsu" in der modernen japanischen Literatur*, Wiesbaden: F. Steiner. (三島憲一・山本尤・鈴木直・相澤啓一訳, 1992, 『私小説——自己暴露の儀式』平凡社.)
- 平岡敏夫, 1985, 『日露戦後文学の研究 (上・下)』有精堂.
- , 1991, 「夏目漱石研究史——新たな漱石像への渉獵的ノート」同編『夏目漱石研究資料集成 別巻』日本図書センター, 1-47.
- 平塚らいてう, [1935.10] 1987.5, 「母の務めを終えた寡婦の生き方」小林登美枝・米田佐代子編『平塚らいてう評論集』岩波書店, 252-5.
- Hölscher, Lucian, [1978] 2004, „Öffentlichkeit,“ in Otto Brunner, Werner Conze, Reinhart Koselleck hg., *Geschichtliche Grundbegriffe: Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland*, Studienausgabe, Bd. 4, Stuttgart: Klett-Cotta, 413-67.
- 品治佑吉, 2014, 「清水幾太郎『流言蜚語』再読——初期メディア研究と形式社会学」『社会学研究』93: 125-51.
- , 2016a, 「戸田貞三における集団概念と社会認識——戸田社会学の歴史的再定位にむけて」『社会学史研究』38: 79-94.
- , 2016b, 「清水幾太郎における『潜在的輿論』と感情」『ソシオロゴス』40: 194-214.

- 池澤勝, 2010, 「はじめに——非業の死者、大量死の死者、戦争死者の記憶と政治性」  
池澤優／アンヌ・ブッシィ編『非業の死の記憶——大量の死者をめぐる表象の  
ポリティックス』秋山書店, 7-30.
- 井上龍夫, 1990, 「出会い」福武直先生追悼文集刊行会『回想の福武直』東京大学出  
版会, 3-6.
- 犬飼裕一, 2016, 『和辻哲郎の社会学』八千代出版.
- 磯前順一／ハリー・D・ハルトゥーニアン編, 2008, 『マルクス主義という経験——  
1930-40年代の歴史学』青木書店.  
岩波書店, 1940.5, 『岩波講座 倫理学 内容見本』岩波書店.  
———, 1941.12, 「総目次」『岩波講座 倫理学 第十五冊』岩波書店, 1-9.  
岩波書店編, 1996, 『岩波書店八十年』岩波書店.
- Jackson, Stevi and Sue Scott, 2002, “Introduction: The Gendering of Sociology,” Stevi  
Jackson and Sue Scott eds., *Gender: A Sociological Reader*, London and New York:  
Routledge, 1-26.
- 亀井勝一郎, 1948.6, 『現代人の遍歴』養徳社.
- 金山浩司, 2016, 「武谷三男論——科学主義の淵源」金森修編『昭和後期の科学思想  
史』勁草書房, 3-47.
- Kant, Immanuel, 1784, „Beantwortung der Frage; Was ist Aufklärung,“ *Berlinische  
Monatsschrift*, H. 12, 481-94. (篠田英雄訳, [1950] 1974, 「啓蒙とは何か」『啓蒙  
とは何か 他四編』岩波書店, 7-20.)
- 唐木順三, 1980, 『科学者の社会的責任についての覚え書』筑摩書房.
- 苅部直, 1995, 『光の領国 和辻哲郎』創文社.
- 加藤弘之, 1900, 『道德法律進化の理』博文館. [初版]
- 加藤哲郎, 2013, 『日本の社会主義——原爆反対・原発推進の論理』岩波書店.
- 河合栄治郎, 1938.12, 『学生と読書』日本評論社.
- 河村望, 1973-5, 『日本社会学史研究 (上・下)』人間の科学社.
- 川合隆男, 2003, 『近代日本社会学の展開——学問運動としての社会学の制度化』恒  
星社厚生閣.
- 河西宏祐, 2016, 『改訂版・労働社会学 50年 (前篇) ——私の歩んだ道』河西宏祐.  
木村吉次, 1996a, 「海軍兵学寮の競闘遊戯会に関する一考察」『教育学研究』63(2):  
129-38.  
———, 1996b, 「明治九年の海軍兵学寮競闘遊戯会と東京在留外人の「アスレチ  
ックスポーツ」」『中京大学体育学論叢』38(1): 1-12.
- 木村聖哉, 1988.10, 「年譜 安田武の生涯」『思想の科学』109: 134-41.
- 喜安朗, 1972, 『革命的サンディカリズム——パリ・コムューン以後の行動的少数派』  
河出書房新社.
- 小林杜人編, 1935.9, 『転向者の思想と生活』大道社.
- 神戸大学『近代』発行会, 1958, 『近代 新島繁 追悼特集号』神戸大学『近代』発行

- 会.
- 高坂正顕, 1964, 『西田幾多郎と和辻哲郎』新潮社.
- Krueger, Ernst T. and Walter C. Reckless, 1931, *Social Psychology*, New York; London; Toronto: Longmans, Green.
- Lichtblau, Klaus, 1996, *Kulturkrise und Soziologie um die Jahrhundertwende: Zur Genealogie der Kulturosoziologie in Deutschland*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Lederer, Emil, 1923, „Aufgabe einer Kulturosoziologie,“ *Hauptprobleme der Soziologie: Erinnerungsgabe für Max Weber*, Bd. 2, München und Leipzig: Duncker & Humblot, 147-71.
- Lengermann, Patricia, and Gillan Niebrugge, 2007, “Thrice Told: Narratives of Sociology’s Relation to Social Work.” Craig Calhoun ed., *Sociology in America: A History*, Chicago : University of Chicago Press, 63-114.
- 松本潤一郎, 1933.10.20 「社会学批判序説」『朝日新聞』東京朝刊 5 面.
- 松浦総三, 1978, 『清水幾太郎と大宅壮一——<sup>ねとりつぐ</sup>詐欺学と処世術の研究』世界政治経済研究所.
- 松沢弘陽, 2011, 「自伝の「始造」——独立という物語」福澤諭吉著・松沢弘陽校注 『新日本古典文学大系 明治篇 福澤諭吉集』岩波書店, 495-513.
- Merton, Robert K., 1957, *Social Theory and Social Structure*, Rev. and enl. ed, New York : Free Press. (森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳, 1961, 『社会理論と社会構造』みすず書房.)
- , 1967, “On the History and Systematics of Sociological Theory,” *On Theoretical Sociology: Five Essay, Old and New*, New York: The Free Press, 1-37. Reprinted in: 1968, *Social Theory and Social Structure*, 1968 enl. ed., New York: The Free Press, 1-38.
- 見田宗介, 1960.4, 「純粹戦后派の意識構造」『思想の科学会報』26: 5-8.
- , [1963a] 1965, 「戦後体験の可能性——「未定の遺産」としての戦後史」『現代日本の精神構造』弘文堂, 1-56.
- , [1963b] 1965, 「現代における不幸の諸類型——〈日常性〉の底にあるもの」『現代日本の精神構造』弘文堂, 1-56.
- 三宅雪嶺, 1950, 『同時代史 第二巻』岩波書店.
- 森岡清美, 1993, 『決死の世代と遺書 補訂版——太平洋戦争末期の若者の生と死』吉川弘文館.
- Münzner, Gerhard, 1928, *Öffentliche Meinung und Presse: Eine sozialwissenschaftliche Studie*, Karlsruhe: G. Braun.
- 武者小路公秀, 1966.2, 「清水さんの年輪」清水幾太郎『現代人生論全集 10 清水幾太郎集 しおり (5)』雪華社.
- Nietzsche, Friedrich, [1872] 1954, „Homer’s Wettkampf,“ in ders., *Werke in drei Bänden*, Bd. 3, München: Carl Hanser, 291-9. (塩屋竹男訳, [1979] 1993, 「ホメロスの競

- 争』『ニーチェ全集 2 悲劇の誕生』筑摩書房, 317-31.) [二つの稿のうち、第二稿を参照.]
- 日本近代文学館, 1985, 『野上弥生子展——その百年の生涯と文学』日本近代文学館.
- 新島繁, 1950.1.1, 「人生論あらべすく」『日本読書新聞』.
- , 1950.3, 「清水幾太郎氏著『私の読書と人生』について」『なにを読むべきか』2(2): 11-3.
- 野上弥生子, 1931.4, 『真知子』鐵塔書院. (再録: 1981.7, 『野上弥生子全集 第七巻』岩波書店.)
- 小幡清剛, 2017, 『丸山眞男と清水幾太郎——自然・作為・逆接の政治哲学』萌書房.
- 小田切秀雄, 1964, 「日本のヒューマニズム」小田切秀雄編『現代日本思想大系 17 ヒューマニズム』筑摩書房, 9-60. (再録: 小田切秀雄全集編集委員会編, 2000, 『小田切秀雄全集 第6巻 状況と文学 III』勉誠出版, 9-54.)
- , 1977, 「清水幾太郎」日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典 第二巻』講談社, 187.
- , 1988, 『私の見た昭和の思想と文学の五十年(上・下)』集英社. (再録: 小田切秀雄全集編集委員会編, 2000, 『小田切秀雄全集 第6巻・第7巻私の見た昭和の思想と文学の五十年(上・下)』勉誠出版.)
- 小田切秀雄・武谷三男, 1971.3, 「知識人の責任と役割」小田切秀雄『知識人の再建』読売新聞社, 59-105.
- 小熊英二, 2003, 『清水幾太郎——ある戦後知識人の軌跡』御茶の水書房.
- 大久保孝治, 1997, 「自伝の変容——清水幾太郎の3冊の自伝をめぐって」『社会学年誌』38: 103-20.
- , 2004, 「社会学者と社会——高田保馬、新明正道、清水幾太郎の場合」『社会学年誌』45: 1-4.
- , 2010, 「清水幾太郎の評伝のための覚書」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』54: 51-66.
- , 2011, 「社会学的評伝における時間の諸相——清水幾太郎研究を事例として」『社会学年誌』52: 21-37.
- 大熊信行, 1957.6, 『国家悪——戦争責任は誰のものか』中央公論社.
- 奥田道大, 1990, 「訳者解題」ロバート・E・L・フェアリス著／奥田道大・広田康生訳『シカゴ・ソシオロジー——1920-1932』ハーベスト社, 227-38.
- 大津山国夫, 1977, 「同伴者文学」日本近代文学館編『日本近代文学大事典 第四巻 事項』講談社, 298-9.
- Park, Robert E. and Ernest W. Burgess eds., 1921, *Introduction to the Science of Sociology*, Chicago: University of Chicago Press.
- Plath, David W., 1980, *Long Engagements: Maturity in Modern Japan*, Stanford: Stanford University Press. (井上俊・杉野目康子訳, 1985, 『日本人の生き方——現代における成熟のドラマ』岩波書店.)

- Rol, Cécil, 2016, „Georg Simmel,“ in Rosemarie Nave-Herz hg., *Die Geschichte der Familiensoziologie in Portraits*, Würzburg: Ergon Verlag, 81-104.
- 坂本多加雄, 1996, 『知識人——大正・昭和精神史断章』講談社。(再録: 2005, 『坂本多加雄選集 I 近代日本精神史』講談社, 315-667.)
- 坂本義和, 1966.6.16, 「学問の世界・政治の世界<上> 清水幾太郎氏の一文を読んで」『朝日新聞 夕刊』7面.
- , 1966.6.17, 「学問の世界・政治の世界<下> 日常的な市民運動の立場」『朝日新聞 夕刊』9面.
- 佐藤郁哉, 2006, 『ワードマップ フィールドワーク 増訂版——書を持って街へ出よう』新曜社.
- 佐藤健二, 1994, 「モノグラフ法」見田宗介・栗原彬・田中義久編『縮刷版 社会学事典』弘文堂, 873-4.
- , 2010, 「総合的コメント——「非常の死」と「家族／社会／国家」と創造の場」池澤勝／アンヌ・ブッシィ編『非業の死の記憶——大量の死者をめぐる表象のポリティクス』秋山書店, 367-75.
- , 2016, 「流言研究と「社会」認識——戦後日本社会学における「社会的なるもの」への想像力」池岡義孝・西原和久編『シリーズ社会学のアクチュアリティ: 批判と創造 2 戦後日本社会学のリアリティ——せめぎあうパラダイム』東信堂, 231-63.
- 佐藤卓己, 2019, 『流言のメディア史』岩波書店.
- 佐藤卓己・苅部直・米谷匡史, [2007] 2012, 「1 一九二——四五年 知の衝撃と再編成」『思想』編集部編『「思想」の軌跡——1921-2011』岩波書店, 51-93.
- 澤地久枝, 1980, 「昭和史のおんな-3-初代女性アナ翠川秋子の情死」『文藝春秋』58(12): 360-77. (再録: 1986, 『続・昭和史のおんな』文藝春秋, 9-39.)
- Schäfer, Fabian, 2012, *Public Opinion, Propaganda, Ideology: Theories on the Press and its Social Function in Interwar Japan, 1918-1937*, Leiden: Brill.
- 瀬沼茂樹, 1966, 「解説」野上弥生子『真知子』新潮社, 352-3.
- , 1984, 『野上弥生子の世界』岩波書店.
- 清水慶子, 1955.4, 「主婦の時代は始まった」『婦人公論』40(4): 119-23. (再録: 上野千鶴子編, 1982, 『主婦論争を読む I 全記録』勁草書房, 23-33.)
- 清水礼子, 1992.4a, 「解題」同編『清水幾太郎著作集 1 社会学批判序説 社会と個人』講談社, 515-26.
- , 1992.4b, 「解題」同編『清水幾太郎著作集 2 流言蜚語 青年の世界 人間の世界』講談社, 383-407.
- , 1992.8, 「解題」同編『清水幾太郎著作集 6 民主主義の哲学 私の読書と人生 他』講談社, 485-510.
- , 1992.9, 「解題」同編『清水幾太郎著作集 7 社会学講義』講談社, 337-48.
- , 1992.10, 「解題」同編『清水幾太郎著作集 8 愛国心 「匿名の思想」他』

- 講談社, 391-406.
- 清水礼子・清水真木, 1993.11, 「目録」清水礼子編『清水幾太郎著作集 19 補遺・年譜・著作目録・執筆目録』講談社, 290-552.
- 庄司興吉, 1975, 『現代日本社会科学史序説——マルクス主義と近代主義』法政大学出版局.
- 庄司武史, 2015, 『清水幾太郎——異彩の学匠の思想と実践』ミネルヴァ書房.
- , 2016, 「下地寛令・清水幾太郎共著『心理学概論』について——新資料の書誌的情報と成立事情を中心に」『早稲田社会科学総合研究』17(1): 1-16.
- , 2020, 『ミネルヴァ日本評伝選 清水幾太郎——経験、この人間的なるもの』ミネルヴァ書房.
- 須賀宏文, 1990, 「したいことをした兄」福武直先生追悼文集刊行会編『回想の福武直』東京大学出版会, 281-3.
- 社会学研究会編, 1931.6, 『文化社会学研究叢書 I イデオロギー論』同文館.
- , 1932.1, 『文化社会学研究叢書 II 知識社会学』同文館.
- , 1932.6, 『文化社会学研究叢書 III 文化社会学』同文館.
- Simmel, Georg, 1908, *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Leipzig: Duncker & Humblot. (居安正訳, 1994, 『社会学——社会化の諸形式についての研究 (上・下)』白水社.)
- , [1911] 1996, *Philosophische Kultur*, in Rüdiger Kramme und Otthein Rammstedt hg., *Georg Simmel Gesamtausgabe*, Bd. 14, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 159-459. (円子修平・大久保健治訳, [1976] 2004, 『ジメメル著作集 7 文化の哲学』白水社.)
- Sombart, Werner, 1925, „Die Formen des gewaltsamen sozialen Kampfes,“ *Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie*, 4(1): 1-12.
- Sorel, Georges, 1908, *Réflexions sur la violence*, 1<sup>re</sup> éd., Paris: Librairie de "Pages libres." (木下半治訳, [1933] 1966, 『暴力論 (上・下)』岩波書店.)
- 高橋徹, 1975, 「「社会学青年」としての福武さん」福武直『福武直著作集 第一巻 社会学の現代的課題 社会科学と価値判断』東京大学出版会, 403-27.
- 高橋芳夫, 1974, 「小田切秀雄の「転向論」とその変節の系譜」『文化評論』153: 2-29.
- 武谷三男, 1982, 『科学者の社会的責任——核兵器に関して』勁草書房.
- , 1985, 『思想を織る』朝日新聞社.
- 竹内洋, 2003, 『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』中央公論新社.
- , [2011] 2015, 『革新幻想の戦後史 (上・下)』中央公論新社.
- , 2012, 『メディアと知識人——清水幾太郎の覇権と忘却』中央公論新社.
- 田中民人・森田義明編, 1965, 『六稜外史 旧制高等学校物語 6』財界評論社.
- 田中友香里, 2019, 『〈優勝劣敗〉と明治国家——加藤弘之と社会進化論』ぺりかん社.

- 谷川稔, 1983, 『フランス社会運動史——アソシオンとサンディカリズム』 山川出版社.
- 田山花袋, 1908.9, 「『生』に於ける試み」『早稲田文学』34: 31-7.
- 富永健一, 2004, 『戦後日本の社会学——一つの同時代学史』 東京大学出版会.
- Tönnies, Ferdinand, 1922, *Kritik der öffentlichen Meinung*, Berlin: J. Springer.
- 東大戦歿学生手記編集委員会編, 1947.12, 『はるかなる山河に』 東大協同組合出版部.
- 東京大学百年史編集委員会, 1985, 『東京大学百年史 通史 二』 東京大学出版会.
- , 1986, 『東京大学百年史 部局史 一』 東京大学出版会.
- Троцкий, Лев Давидович, 1924, *Литература и Революция*, 2-е доп, Москва: Гос. (桑野隆訳, 1993, 『文学と革命 (上・下)』 岩波書店.)
- 鶴見俊輔, 1960.2, 「翼賛運動の学問論——杉靖三郎・清水幾太郎・大熊信行」 思想の科学研究会編『共同研究 転向 中』 平凡社, 152-200.
- 上野千鶴子編, 1982, 『主婦論争を読む I 全記録』 勁草書房,
- 浦西和彦編, 2000, 「小田切秀雄 年譜」 小田切秀雄全集編集委員会編『小田切秀雄全集 別巻 追想の小田切秀雄』 勉誠出版, 301-10.
- 渡辺かよ子, 1997, 『近現代日本の教養論——一九三〇年代を中心に』 行路社.
- 和辻哲郎, [1918.10] 1991.3, 「断片」『和辻哲郎全集 第二十二卷』 岩波書店, 127-34.
- , [1931.12] 2017.9, 「倫理学——人間の学としての倫理学の意義及び方法」 荻部直編『初稿 倫理学』 筑摩書房, 29-203.
- , 1932, 「現代日本と町人根性 (上・中・下)」『思想』119: 457-83, 120: 621-51, 121: 753-80.
- , 1934.9, 『人間の学としての倫理学』 岩波書店. (再録: 1962.7, 『和辻哲郎全集 第九卷』 岩波書店, 1-192.)
- , 1935.9, 『風土——人間学的考察』 岩波書店. (再録: 1979.5, 『風土——人間学的考察』 岩波書店; 再録: 1962.6, 『和辻哲郎全集 第八卷』 岩波書店, 1-256.)
- , 1937.4, 『倫理学 (上)』 岩波書店. (再録: 1962.8, 『和辻哲郎全集 第十卷』 1-329.)
- , 1940.5, 「刊行の辞」『岩波講座 倫理学 内容見本』 岩波書店, 1-4. (再録: 1991.8, 『和辻哲郎全集 第二十四卷』 岩波書店, 293-5.)
- , 1941.12, 「終刊の辞」『岩波講座 倫理学 月報』15: 1-2. (再録: 1991.8, 『和辻哲郎全集 第二十四卷』 岩波書店, 298-300.)
- , 1949.5, 『倫理学 (下)』 岩波書店. (再録: 1962.9, 『和辻哲郎全集 第十一卷』 岩波書店, 1-448.)
- Weber, Max, [1913] 1968, „Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie,“ Johannes Winckelmann hg., *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Dritte, erweiterte und verbesserte Auflage, Tübingen: J.C.B. Mohr, 427-74. (海老原明夫・中野敏夫訳, 1990, 『理解社会学のカテゴリー』 未

- 來社.)
- , [1922] 2001, *Wirtschaft und Gemeinschaft: Die Wirtschaft und die gesellschaftlichen Ordnungen und Mächte. Nachlaß: Gemeinschaften*, Wolfgang J. Mommsen hg., *Max Weber Gesamtausgabe Abt. I Bd. 22-1*, Tübingen: J.C.B. Mohr.  
(濱島朗訳, 1954, 『権力と支配』みすず書房.)
- 山田洸, 1987, 『和辻哲郎論』花伝社.
- 安田三郎, 1958, 「モノグラフ法」福武直・日高六郎・高橋徹『社会学辞典』有斐閣, 899.
- 安田武, 1957.11, 「清水幾太郎著作目録」清水幾太郎『組織と人間』平凡社, 305-30.
- , 1964.11, 「清水幾太郎論」『思想の科学』68: 10-8.
- , [1967] 1969.11, 「現代学生論 (二)」『人間の再建——戦中派・その罪責と矜持』筑摩書房, 167-86.
- , [1967.1] 1969.11, 「戦没学徒兵の慟哭——二十一年目の風潮に思う」『人間の再建——戦中派・その罪責と矜持』筑摩書房, 32-47.
- , [1967.6] 1969.11, 「戦中派・その罪責と矜持——戦前・戦後派に与える」『人間の再建——戦中派・その罪責と矜持』筑摩書房, 48-72.
- , 1977, 『ある時代』日本エディタースクール出版部.
- , 1985, 『昭和青春読書私史』岩波書店.
- , 1990, 『親父の存在』廣濟堂出版.
- 吉見俊哉, 2000, 「メディアを語る言説——両大戦期間における新聞学の誕生」栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編『内破する知——身体・言葉・権力を編み直す』東京大学出版会, 177-237.
- , 2003, 「「テレビジョン時代」解題」『思想』956: 7-10.
- Young, Kimball, 1931, “Contribution of Psychology to the Study of Group Conflict,” The American Sociological Society ed., *Social Conflict: Papers Presented at the Twenty-Fifth Annual Meeting of the American Sociological Society, Held at Cleveland, Ohio, December 29-31, 1930*, Chicago: University of Chicago Press, 111-24.

## 写真出典（本文中で出典に言及したもの除く）

- p.13 安田武写真.....安田武，[1982] 1987，『昭和 東京 私史』中央公論社.
- p.14 福武直写真.....蓮見音彦，2008，『福武直——民主化と社会学の現実化を推進』東信堂.
- p.38 野上弥生子と長男素一写真.....瀬沼茂樹，1984，『野上弥生子の世界』岩波書店.
- p.67 小田切秀雄と妻みゆき写真.....小田切秀雄全集編集委員会編，2000，『小田切秀雄全集 別巻 追想の小田切秀雄』勉誠出版.
- p.136 安田武・鶴見俊輔・山田宗睦写真.....『思想の科学』1988年10月号. [安田武追悼号]

## (5) 論文の内容の要旨

### 1. 博士論文の目的、問題設定

本博士論文（以下、本論文）は、清水幾太郎（1907-88）の社会学的著作を主な検討対象とし、彼の社会学者としての歴史的な位置付けを明らかにすることを目的とする。日本の社会学史の中で、清水幾太郎は、主に戦後の論壇の中で時には左派のオピニオンリーダーとして、時には右派の核武装論者として論陣を張った著述家として、もっぱらその政治的立場の変遷に徴してその歴史的な位置付けがなされてきた。しかし、清水は同時に、社会心理学・社会意識論研究、メディア研究、社会学史研究といった多くの分野において後続世代の社会学者に大きな影響を与えた社会学者でもあった。『流言蜚語』（1937）、『愛国心』（1950）といった社会心理学的研究、また『オーギュスト・コント——社会学とは何か』（1978）といった学史的著作は思想史や社会学の観点から高い評価を受け、今なお再刊が進められている。

そこで本稿では、清水幾太郎の社会学がいかなる問題意識の下に展開されたものであったのかを明らかにすることをその課題とする。既存の清水論では、彼の政治的立場の振幅の大きさや関心の変遷、また時事的な発言も含めた著述の多さのため、彼が社会学者としての姿を統一的に描くことはなされてこなかった、という問題があった（2.にてより具体的に論じる）。

本論文では、清水幾太郎の社会学に一貫した主題があるという立場に立ち、上記の問題を克服することをめざした。具体的には、清水幾太郎の社会学的著作のなかで、「人生」、つまり人間が社会の中でどのような自己形成を果たすのかという主題と、「闘争」、つまり人間が生きること自体が社会の中に潜在する矛盾や欠陥との闘いであるという主題とが密接に関連しているという点に着目することにより、彼の1930年代から50年代の著作のうち主要なものの中に、これまで論じられてこなかった清水の一貫した社会学的関心が通底していることを明らかにできるのではないかと、という見込みのもと、分析を進めた。

### 2. 先行研究の整理と本稿の立場

これまでの清水幾太郎に関してどのような研究がなされてきたのか。本稿は、清水に関する先行研究を、大きく以下の三つの研究群に区分している。

第一に、主に日中・太平洋戦後から60年安保闘争の時期までの平和運動における清水の活動に着目して、彼を戦後の出版メディアの中で活躍した政治的オピニオンリーダーとみなし、同時期の社会の中に位置づけようとする知識人論的な研究群である。こうした動向を代表する主要な研究として、小熊英二（2003）、竹内洋（2012）が挙げられる。これらの研究は、清水の社会学的の内容を分析の対象としていないという点で本稿の関心とは距離が大きい。

第二に、戦前以降の社会学的著作も含む清水のテキストを分析の対象として、清水の思考と活動の変遷を明らかにしようとする思想史的な研究群である。主要な研究として、庄司興吉（1975）、天野恵一（1979）、庄司武史（2015, 2020）が挙げられ

る。これらの研究は、清水の思想的歩みをテキストベースで検討しているものの、彼の社会学的著作の主題、意義、問題意識に対する十分なフォローがなされていない。

第三に、社会学内部の個別の分野から清水研究の学説史的な意義を回顧する研究群である。メディア研究の分野では吉見俊哉（2000）、Fabian Schäfer（2012）、社会学史の分野では河村望（1973-5）、秋元律郎（1979）などが挙げられる。これらの研究は、清水の社会学をそれぞれの分野に即した関心から部分的に扱ったものであり、清水の研究群に就いている問題意識が明らかになっておらず、個々の研究群の相互連関が不明確のままである。そのため、個々の研究に対する評価も不十分のままになっている。

こうした研究動向に対し、清水の社会学を統一的に描くことを目指すという立場から、本稿は次のような視角を取って分析を進めた。

第一に、上記の先行研究は共通して、清水が書いた自伝的著述をベースにして、清水の活動や思想を解釈しようとしている。しかしながら、本稿は清水の自伝的著述自体が、人間の人生の歩みを社会との闘争とみなすという彼の社会的関心と密接に関連して書かれた作品であるという立場に立ち、その相対化を目指した。具体的には、分析の対象とする個々の社会的テキストが扱っているところの内容、問題意識、受容のされ方を、テキスト自体の記述内容や社会的概念、これまで扱われてこなかったテキストとの関係、出版に至るまでの経緯を点検することによって、彼の思想的行路を独自の仕方でもトレースし直すことをめざした。

第二に、同時代の人間関係の中で、清水がいかなる目的をもってその著作を書いていたのか、また、どういう読者がどのように清水の著作を読んでいたのかという点に着目し、清水の社会学を取り巻く同時代的なトポスを明らかにすることをめざした。そうすることで、清水の社会的著作の内容をよりよく理解することができるのみならず、清水の社会学いかなるものとして同時期の社会に浸透していったのかを、それ自体社会学史の一コマとして論じることができるという見込みのもと分析を進めた。

### 3. 全体の構成

本論文は、冒頭の「序」を除いて、1章から5章、そして終章という全6章の構成を取った。

1章では、上記1.および2.で述べたところの問題設定、先行研究との関係、本論文の立場と方法をより具体的に論じた。その概要は上に論じた通りであるため、再論は避ける。

次に、2章では、清水が社会学という学問を研究者としての主に1930年初頭から中盤までの時期における『社会と個人——社会学成立史（上）』（1935）、また『日本文化形態論』（1936）所収の論文といった諸期の清水の社会的著述の分析を行った。その結果、これまでの研究ではマルクス主義から社会学へのなだらかの転向とみなされてきた1930年代の清水の思想的歩みが、「文化形態論」という立場からする社会的な分析として一貫して捉えられることが明らかになった。さらに、清水がそこで問

題にしている文化と人間の間には必然的に葛藤が生じるという事態にいかに向き合うべきかという問題意識は、1930年代後半以降の『青年の世界』（1937）、『社会的人間論』（1940）にも引き継がれていることが明らかになった。

3章では、『流言蜚語』（1937）や「競闘」（1941）といった主に1930年代後半以降の著作の分析を通じて、「闘争」という概念を人間の私的な生活の中に浸透する基礎的概念として扱っていることを明らかにすることを試みた。その結果、『流言蜚語』のような著作が、単に流言の流布や災害時の混乱といった個別的な現象を解明することを目指しているのみならず、公と私の関係の動態を把握するための形態学的な分析枠組みを前提にしていたものであること、またその際に、清水がゲオルク・ジンメルに発する形式社会学やマックス・ウェーバーの闘争論、またはアメリカのシカゴ学派の草創期社会心理学といった、さまざまな学問的動向を独自に咀嚼して分析概念を編み出していたことが明らかになった。

4章では、これまでの分析を前提として、生きることがすなわち闘争である、という清水の問題意識が強くあらわれている分析事例として、『社会的人間論』（1940）を中心とする彼の家族論を取り上げた。その作業を通じて、清水の社会学が同時代アメリカの社会集団論と社会的接触論を咀嚼することを通じて、人間のライフコースに対して社会的な矛盾や葛藤がどのような屈折を経て影響を与えると考えていたのかを明らかにした。加えて、5章にて検討する清水の叙述スタイルも含めて、先行する文芸作品——自然主義的な私小説——が清水の社会的著述に影響を与えていることなどを明らかにした。

5章では、日中・太平洋戦争後の清水がいち早く『私の読書と人生』（1949）をはじめとする自伝的著述を著し、自分自身の生涯の語りを『愛国心』（1950）や『社会学入門』（1959）といった社会的著述の中にも取り込んでいくという事態の分析を通じて、最初期において社会学という学問に対して違和感のあった清水が、どのように社会学を受け止めようとしていたのかを明らかにした。その結果、清水が自分自身が社会学を上手く受け止められず、それを咀嚼しようとする格闘した経験を振り返ることで、かえって一定の距離感をもって社会思想や政治的立場をとらえ、それとの関わりを人びとがそれぞれの仕方で捉えるためのツールとしての社会学の意義を見出したことを明らかにした。

#### 4. 意義と課題

本稿が以上に示してきた知見の意義は、二点に求められる。

第一に、「人生」と「闘争」の相即不離な関係という視点から清水の著作読みなおすことを通じて、人間の日常的な生活と、政治対立や社会問題といった闘争の争点との距離を絶えず測定しようとする知識として社会学を捉えようとする視点が清水の社会学に通底していることを明らかにした。

第二に、知識人論的な視点からの清水像の刷新である。清水の社会学者としての姿を捕えなおし、また、それがそれぞれの時代にどう受容されたのかを明らかにする

ことを通じて、社会学の視点からの教養論として捉えられることを明らかにした。

最後に、今後の研究課題として、(1) 清水の平和運動と社会学の連関を明らかにするという点、(2) 1960 年以後の清水社会学の展開に触れ、その後の転向問題などの重要な論点への示唆を与えるという点、を挙げておく。

#### **文献書誌情報について**

論文本体の参考文献一覧を参照されたい。